スカートのパターンと縫製技術の研究

石川泰子・初鹿広美

Studies on Pattern and Sewing Technique for Skirt

Taiko ISHIKAWA and Hiromi HATSUSHIKA

要　約

多様化するスカートのデザイン傾向を分析し、ミセス向きのスカートのパターンとその縫製加工について試作研究した。

パターンの試作は、立体裁断を導入し、タイト・スカートを面分割することにより、多様化するデザイン・スカートを作成する手がかりが得られた。また、スカートの作成にあたって、縫製加工の均一性を高めるための工程指示図を作成し、マニュアル化した。試作内容は次のとおりである。

1．タイト・スカートの面分割方法
2．ソフト・カジュアル・スカートのパターンと縫製加工
3．フェミニン・スカートのパターンと縫製法
4．スーツ、ワンピースの応用試作

1．緒　言

婦人の衣服は、細分化される程、ファッションと技術の一体化が要求される。

本研究は、日頃サンプル作成で苦労している企業内の企画担当者に、基礎資料として提供する目的で試作研究を行った。

2．研究方法

2－1　企業からの質問分析

(1) マーメイド・スカートについて
(2) トランペット・スカートについて
(3) ベルトレス・スカートについて
(4) 装飾パネルを付けるスカートについて

上記の質問を明確化させるために、ファッション傾向の分析と着装場面としてのコミュニケーションを分類し、試作研究の方向付けとした。

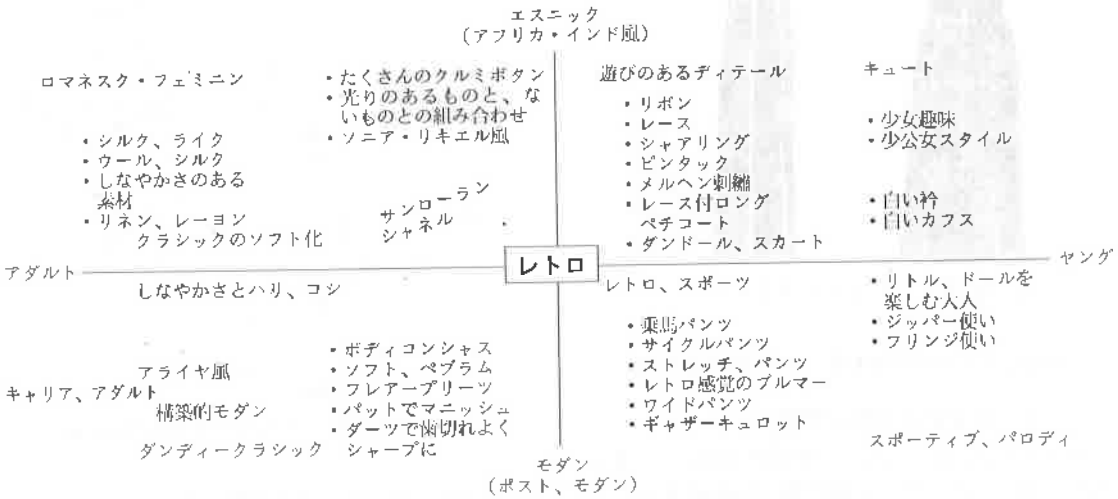

図1　ファション傾向

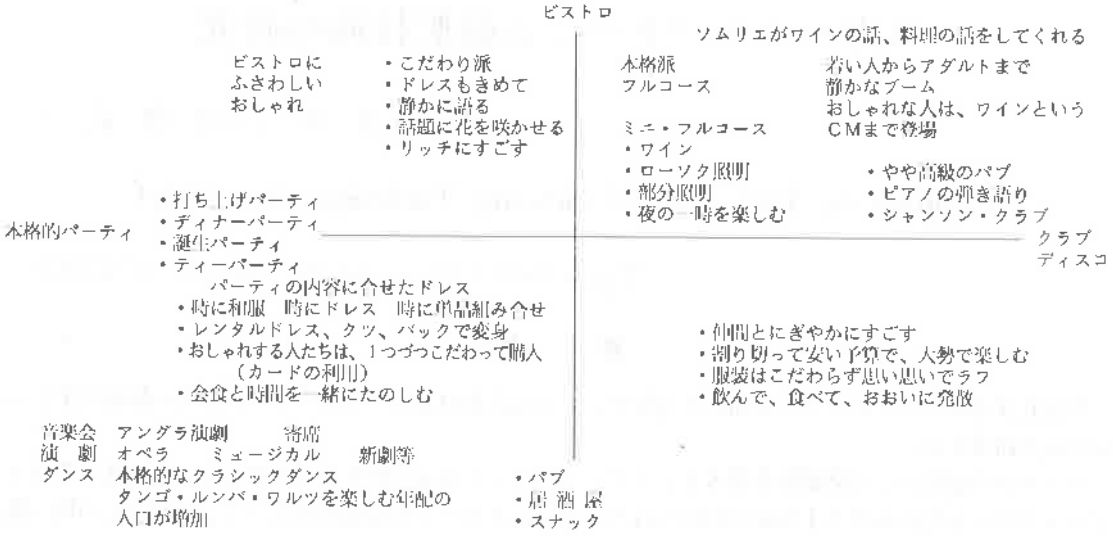

図2　コミュニケーションの場面

2—2　試作用ボディー及び編地

立体裁断用ボディーは、帝人フェア・レディーの9号及び11号を使用した。

3．シルエット別パターンの試作

3—1　タイト・スカート

装飾のまったくないスカートは、編地、パターン、縫製加工の善し悪しが明確に現れる。編地のコース方向、ウエル方向を整えて、ウエスト周辺の余分なものを裁ち落してシャープなシルエットを作る。

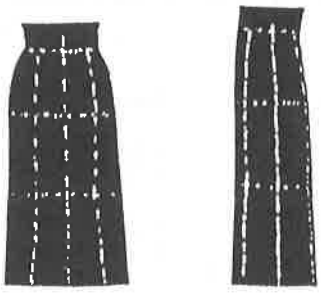

写真1　タイト・スカート

これが、いろいろのスカートの基本である。

3—2　ソフト・カジュアル・スカート

後スカートに部分プリーツを付ける場合、トリック仕立てにした。ニット地に切り換えを入れ、プリーツをプラスすると縫い目が重なり、厚くなるのでシルエットがくづれやすくなる。そこで、プリーツ部分を裏地に付け、その上に表地の枠を乗せ、ベルト部分で一緒に縫い止めて仕上げた。

写真2　後プリーツ入りスカート

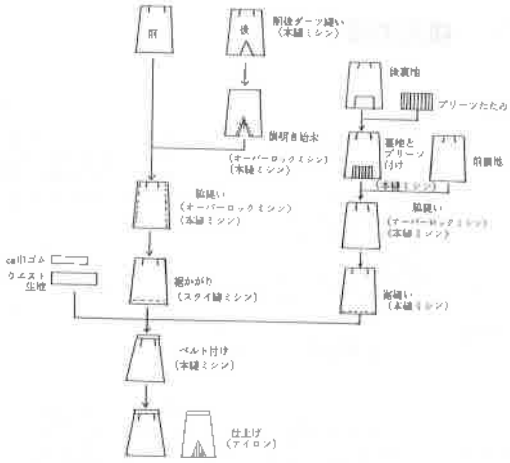

図3　後プリーツスカート工程指示図

3—3　フェミニン・スカート

ミセス向のスカートとして、人気のある女らし

い、ソフトなシルエットのスカートをまとめて、フェミニン・スカートと言う。その中から特に今のファションで注目されているスカートのパターンを試作した。

(1)　トランペット・スカート

ヒップライン下までフィットさせ、その下の部分に切り換えを入れ、ギャザー又はフレアーのパネルをつけ、スリムで歩き易いよう機能性を持たせた。

写真３　トランペット・スカート

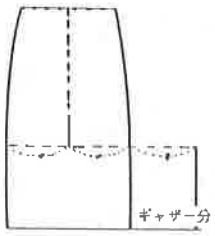

図４　トランペット・スカート

(2)　マーメイド・スカートⅠ

人魚がイメージ・ルーツで、フレアーを入れるために切り開き線を入れる。この分割と開き度によって、フレアーの分量が加減できる。

写真４　マーメイド・スカートⅠ

(3)　マーメイド・スカートⅡ

レトロ・ファッションの代表的なもので、ボディ・フィットとアシメトリーの装飾を組み合せたもの。

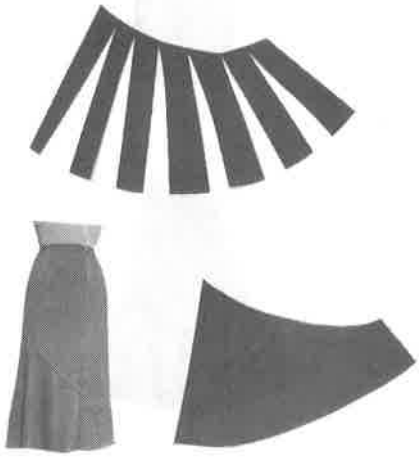

写真４　マーメイド・スカートⅡ

切り換えの縫製は、図―５のように処理するとスッキリ仕上る。

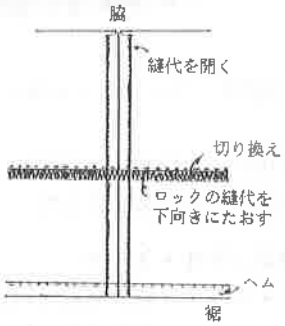

図５　スカートの切り換え

４．応用試作の結果

上記各種のスカートを基に、応用試作をした結果は次のとおりである。

４－１　フェミニン・スーツ

８枚のパネルを縫い合せたスカートは、ヒップラインから下を各５度切り開き、フレアー分を入れる。縫い代を少なくし、裾はメロウ・ミシンに

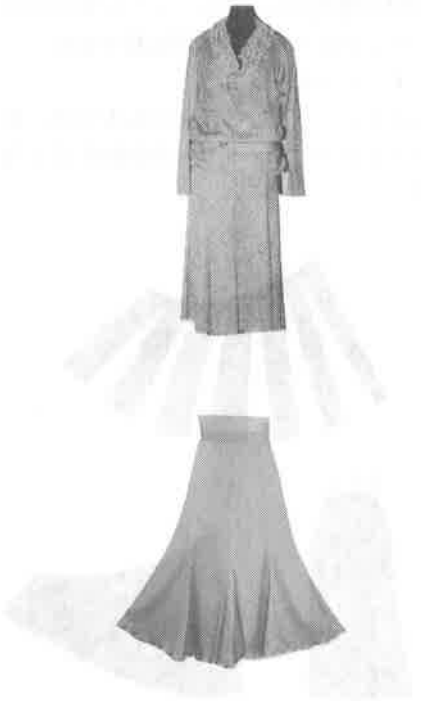

写真6　フェミニン・スーツ

よりフリル状に仕上げた。上部衣は、スカートに合せ、沢山のフリルを装飾とした。

4－2　カジュアル・スーツ

ドルマン・スリーブの上部衣に対して、後全開になるミニ・スカートを組み合せた。基本のタイト・スカートをベルトレスにし、見返し部分とウエスト部分に接着芯を付け補強した。注意点は、接着芯にも縫い代分を入れ、表地と一緒に縫い合せることである。

写真7　カジュアル・スーツ

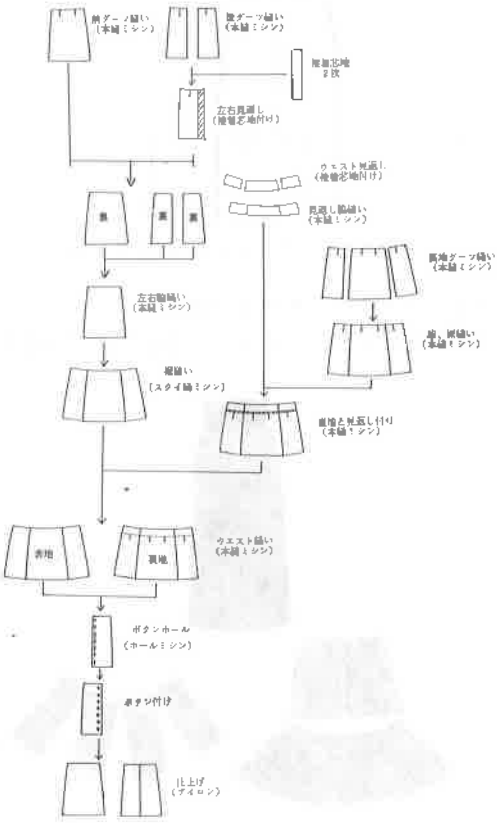

図6　スカートの工程指示図

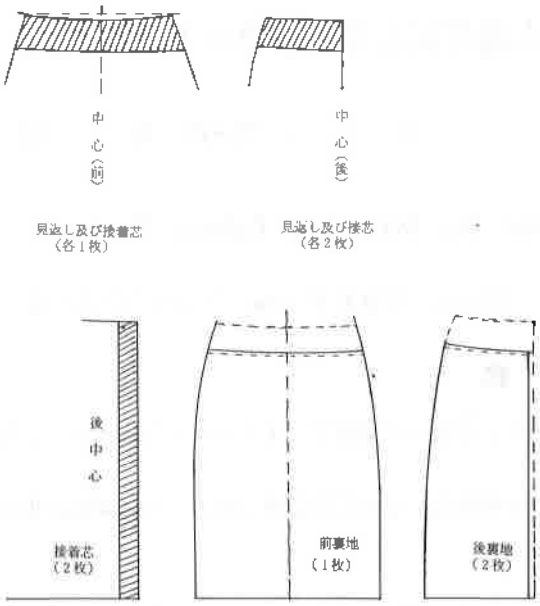

図7　スカート芯地と裏地

4－3　クラシック・ドレス

全体を構築的なシルエットに仕上げるため肩パットを入れ、袖山を強調する。ボトムの部分はタイトの基本を導入し、局部的に伸び止めとして接着芯地を補強する。

写真8　クラシック・ドレス

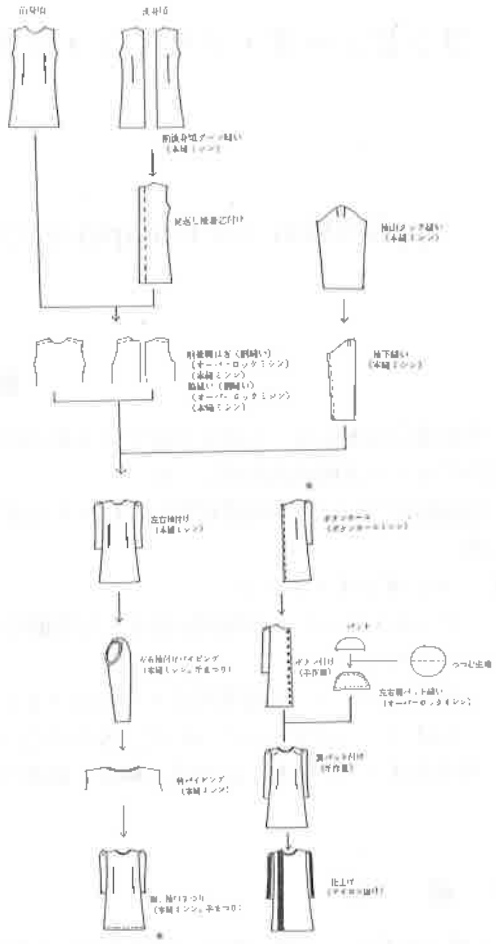

図8　ドレス工程指示図

5．結　　論

婦人物は、変化要因が多く、短期間での物作りが要求される。マニュアル化した本研究結果は、企業内の企画担当者に提案する。

縫製面では、マニュアル化した工程指示図により、伝達ミス防止と、最終製品のスタイル・イメージの統一が計れる。この指示図は技術指導の折に提供し、活用されている。

なお、試作品のスーツ（写真－6）は、第24回「全国繊維技術展」において中小企業庁長官賞を受賞した。

参考文献

岩崎百合子著：ジャージィの衣服造型、
日本ニットウェアデザイン協会（1972）
P21～24